

猛暑がやわらぎ、秋の訪れを感じる季節になってまいりました。
現在会員登録数 4,780 人さま。次号は 10 月 20 日発行の予定です／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

《6》富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■ ----- ■
【1】お知らせ

● 国際講演会「こころを自由に解き放つ ローラ・カーリンが創る絵本の世界」参加者募集

・日時：10月31日（土） 13：00～16：00

・講師：ローラ・カーリン（イギリスの絵本作家）

・通訳：松下宏子（関西大学ほか非常勤講師）

・会場：大阪府立中央図書館 多目的室

・大人向け（中学生以上可） ・定員：50人 ・参加費：1000円

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#081031

● 小学生向けワークショップ「イギリスの絵本作家 ローラ・カーリンさんと絵本をつくろう」参加者募集

・日時：11月1日（日） 13：00～16：00

・講師：ローラ・カーリン ＊通訳つき

・会場：大阪府立中央図書館 大会議室

・小学1年生～6年生対象 ・定員：20人 ・参加費：500円

※詳細、お申し込みは ↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/01_kids/index.html#081101ws

● «ご寄付をお願いします» 当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701>

■ ----- ■
【2】コラム

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『ふたりのあした』 石井睦美/著 牧角春那/絵 理論社 2026年9月 対象年齢：小学校高学年以上

* 今回のゲストは当財団理事の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：小学6年生の朋美は、同じクラスで幼なじみの杏里ちゃんと仲良くしているが、ちょっと距離も感じていて「ほんとうの友だち」ではないと思っている。卒業をひかえた1月2週目の3日目に、中野さんが転校してきた。最初、みんなは中野さんに話しかけるが、中野さんは、礼儀正しい話し方で人を寄せ付けない。先生は、朋美に、中野さんと家が近いので、いっしょに帰るように言うが、中野さんは先に帰ってしまう。ある日、朋美は、帰宅時にたまたま、中野さんの家の近くで、中野さんに出会い、中野さんのお母さんに家に招かれて、中野さんの家族が人形劇団だということを知り、そこから少しずつ親しくなっていく。

T：読み終わってジーンとききました。

Y：実は私も。とはいえ、お涙頂戴の作品ではまったくありません。少女の友情物語です。

T：ふたりがトイレまでいっしょに行くようなベタベタな関係じゃないところがとても新鮮でおもしろかった。

Y：距離感が絶妙で、転校を繰り返しているために友だちができないことが当たり前になっていて、人に壁を作っている中野さんと、空想好きで、現実からちょっと浮いたところで生きている朋美が少しずつ友だちになっていく過程がとても丁寧に描かれていると思いました。

T：朋美は、おばあちゃんから生前にもらった遺品の指輪に「おばあちゃん」と毎日、話しかけたり、学校ができたときからいるという木を「ハカセ」と名付けたり、イマジナリーフレンドのような存在に助けを借りながら、日々を生きています。

Y：だから、社会性があって少し大人びた杏里ちゃんには仲良くしてもらっているという感じで、友だちだと思われていないなということに気づいています。

T：そんな中、近所に引っ越してきた中野さんが現れます。中野さんの両親は人形劇団を主宰していて、家の前で朋美が中野さんに話しかけているのを見ると、声をかけて家に招きいれます。そして、少し後の別の日、朋美と中野さんのふたりだけに人形劇を見せてくれます。大人が子どもを見守っている様子を心地よく感じました。

Y：人形劇の演目はケネス・グレアムの「たのしい川べ」（本は、『たのしい川べ ヒキガエルの冒険』 石井桃子/訳 岩波書店）で、それは、たまたま、朋美が読んでいた本でした。物語を共有することの楽しさが伝わる場面です。

T：中野さんの真千子おばさんが、同じ本を同じ時間に読んだらどうかと提案します。読書は個人的な営みであると同時に、物語は人をつなぐということが大切にされていることがわかります。

Y：最後に中野さんと朋美がけんかをしてしまうところはドキドキしました。

T：中野さんの家族の中に招き入れられた朋美は、今度は、中野さんを秘密の場所に案内します。そのことがあったから、おしまいには中野さんから朋美への働きかけがあったんだなと思って読みました。

本には文字のないモノクロの風景だけの見開きの絵が2か所あって、いろいろな意味で物語の楽しさや読書の楽しさが伝わってくる作品だと思います。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第 132 回 「疑獄元凶」

視線による心理戦

作品「疑獄元凶」は、語り手である〈わたし〉の次の一節によって幕を開けます。

とにかく向こうは検事の立場、

今の会釈は悪くない。勲績のある上長として、盛名のある君子として、礼を尽した態度であった。

政治家であり、被告でもある〈わたし〉は、まもなく始まる公判を前に、検察官の応対にひとまず満足と安堵を覚えます。しかし、若手検事から〈上司の儀容〉で対峙されると、相手の鋭い眼差しと毅然とした態度に強い動揺を覚えます。〈わたし〉はひどく狼狽し、山や林や森、寺など静穏な風景を想起して心の平穏を保とうとします。しかし、平常心を回復させることは容易ではありません。

やがて検事から人間的な表情が失われ、〈わたし〉にはその本性が剥き出しになったかのように映ります。小さな天狗、豺（やまいぬ）のトーテム、黄いろに光る頬、白い後光。自身を追い込む象徴的なイメージが次々と立ちあられ、〈わたし〉は〈ここで折れては何にもならん〉と自らを鼓舞しつつ、相手の眼差しを克服しようとしします。しかし精神的優位は遠く、敗北感が漂い始めます。憎悪を帯びた検事の眼は〈二つの覗き窓〉へと変容し、さらには不吉な牢獄の窓のように見え、〈わたし〉はついに、斯様な状況に陥った〈元凶〉としての自分自身を内省せざるを得なくなります。

本作は 2,000 字にも満たない小品ではありますが、〈わたし〉が内なる葛藤と有罪への恐怖を抱えつつ、対峙する相手に屈すまいともがく心の揺らぎを、濃密な筆致で描き出しています。この物語の背景には、昭和初期の「五私鉄疑獄事件」があるとされます。北海道鉄道や伊勢電気鉄道など、五つの私鉄事業者が当時の鉄道大臣・小川平吉に便宜を図る見返りとして金銭を供与したとされる汚職事件で、最終的に小川は有罪判決を受けました。

実際の事件を素材として構想されましたが、作者の関心は専ら政治家である被告の内面へと向けられています。検事と被告は一言も言葉を交わさず、ただ視線のみをもってお互い対峙し、心理戦を展開しました。その緊張の構図とともに、自身を鼓舞し、正当化し、そして内省する被告のリアルな心の動きにこそ、本作の核心があると考えられます。（ペ吉）

（本文の引用は、筑摩書房版『宮沢賢治コレクション 2 注文の多い料理店』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 87

「ようこそ、地獄の推理ゲームに！」

教授をのぞく全員の手がとまり、化けものでも見るかのように、とつぜん動きだしたミニコンポを凝視する。（教授だけは、マイペースで食事をつづけている。）

「直接、諸君の前に姿をあらわしたいところだが、テーブルであいさつする失礼をゆるしてくれたまえ。なにせ、わたしがこの推理ゲームの犯人役なのでね。」

そして、クックククという笑い声はいる。

男か女かわからない声。まるでコンピュータで合成したみたいな声。笑い

声は、こわれる寸前のロボットの悲鳴のようだ。

「わたしの名前は魔女。わたしの送ったゲームの駒は、気に入ってくれたかな？」

（『魔女の隠れ里 名探偵夢水清志郎事件ノート』 はやみねかおる/作 村田四郎/絵 講談社青い鳥文庫 1996年10月 p.139）

当財団では、9月5日（土）に、学校司書の研究会「気になる本を読む会」と共催で、はやみねかおる先生をお招きして、「スペシャル対談 作家×学校司書「はやみねかおる作品の魅力を探る！」」を開催しました。

「名探偵夢水清志郎シリーズ」、「怪盗クイーンシリーズ」、「都会のトム＆ソーヤ」、それ以外に分けて「気になる本を読む会」のメンバーが、簡単な作品紹介をし、そのあと、はやみね先生に質問し、丁寧にお答えいただきました。その中で、「名探偵夢水清志郎シリーズ」は、本格「ミステリー」を強く意識して書いているとおっしゃっており、30年前に夢中になって読んだ『魔女の隠れ里』を読み直し、納得しました。

この本の語り手は、夢水清志郎の隣に住む中学1年生の三つ子、亜衣（あい）、真衣（まい）、美衣（みい）の長女亜衣。この本では、雑誌『セ・シーマ』の編集者でとてもタフな女性である伊藤真里が、夢水清志郎と三つ子を誘って二度の取材旅行に出かけます。第Ⅰ部は雪国へ行き、子どもが雪霊（ゆきだま）の藪へ行くと消えるという謎と、不思議なスキーの滑降跡の謎を解きます。そして、第Ⅱ部では、笙野之里（筆者注：遠野の里を思わせる）へ取材に行き、旅館「楼乱荘」へ到着したとたん、11体のマネキン人形が「魔女」から届き、旅館のオーナー、村長、医者、住職、上越警部たち（筆者注：部屋から出てこないオーナーの姉を入れて全員で11人）と食事をしていると、「ミニコンポのスイッチがはいって、カセットテープがまわりはじめ」（筆者注：ここは昭和です）ます。

ここから、アガサ・クリスティ『そして誰もいなくなった』を思わせるように、一体ずつマネキンが消えて、それがその人が「死んだ」ことになります。魔女とは誰なのか。なぜ、こんなゲームを仕掛けたのか。名探偵夢水清志郎によって最後に謎が解かれ、その推理の鮮やかさとともに、この事件の背後にある人の思いに気づいて心が揺れます。それこそ、はやみね作品の魅力の一つだと思いました。（Y）

《4》 行って来ました！

神戸ファッション美術館で11月29日まで開催されている特別展「水木しげる魂の漫画展」に行ってきました。水木しげる（1922-2015、以下水木とする）の水彩画や鉛筆画、漫画の原稿、下書き、手帳、アイデアのメモやプロット、愛用の道具、写真、編集者やアシスタントのインタビュー映像、ブロンズ像など、350点が展示されていて、とても見ごたえがありました。

全体はプロローグと8章で構成されており、第1章「武良茂アートギャラリー 少年天才画家あらわる！」には、擬人化された虫の絵巻や白雪姫の絵など10代の頃の水彩画がたくさんあり、子どものころから絵が得意だったことがよくわかります。

水木は、絵を勉強していた21歳の時、戦争に召集されて激戦地ラバウルに出征し、22歳の時に爆撃で左腕を失って、24歳で日本に帰国します。武蔵野美術学校に通いますが中退し、紙芝居作家および貸本漫画家になります。第2章「水木しげる漫画研究 片腕で生み出す独自の画法」では、プロになった水木の作画方法が丁寧に紹介されていました。特に興味深かったのは、作画

のために集めた資料や写真を元に描かれた山道や森林、街中、寺社仏閣等の写真のように緻密に描きこまれた背景画でした。点描で描かれたちょっと不気味な背景に、妖怪などのキャラクターがいることで、妖怪の存在がとてもリアルに感じられます。

また、カラーの絵は「染め粉」で着色しているとのことで、ヨーグルトの空瓶を使った道具が展示されていました。オレンジっぽい赤色が美しく、モノクロと彩色された絵の両方が展示されていることで、色があることの美しさ、不思議さを感じることができました。

そして、第3章「水木しげる人気三大漫画 鬼太郎／悪魔くん／河童の三平」、第4章「総員玉砕せよ！ 壮絶な戦争体験記」、第5章「溢れる好奇心 人物伝」、第6章「短編に宿る時代へのまなざし」とジャンルごとのマンガ作品の紹介が続き、第7章「妖怪世界へようこそ」には妖怪の絵と妖怪のブロンズ像が紹介され、第8章「人生の達人・水木しげる」では水木のインタビュー映像と掛け軸が展示されていました。

第7章に展示されていた「タンコロリン」や「さがり」の原画を見て、子どもの頃に怖いもの見たさで読んだ『妖怪なんでも入門』（小学館 1974年）を思い出しました。水木の絵は、生と死がいつも隣り合わせだということを強く意識させてくれます。展示を通して水木の一生を概観することによって、水木作品は、生と死に向き合い続けてきた水木ならではの世界なのだと改めて思いました。（K）

神戸ファッション美術館 <https://www.fashionmuseum.jp/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

第7章 天沢退二郎先生

その1 『犬のバルボッシュ』（下）

1982（昭和57）年2月13日の夕刻、パリ10区ボン・ヌーベルの韓国料理「竹園」で私たちが食事をはじめたころ、日本人の男性ふたりが店に入ってきて、となりのテーブルに案内されました。ひとりは、天沢退二郎先生（1936～2023年）でした。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

前回（第32回）のリード文および本文の冒頭に下記のあやまりがありました。おわびして、訂正いたします。

（誤）1982（昭和57）年3月13日の夕刻、……

→（正）1982（昭和57）年2月13日の夕刻、……

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

《6》 富安陽子 I I C L O ストーリーコンペ 第3回

ストーリーコンペ 第3回の投票受付中！

キーワード「トビウオ」「くつ下」を使った応募作品の中から選ばれた5作品のうち、いちばんおもしろいと思った作品にご投票ください。

◆こちらに5作品を公開しています。↓

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html#192_5sakuhi

◆投票締め切り：9月30日（水）

投票はこちらから→ <https://forms.gle/STMPm7vwRuaSeUr9>

みなさんの投票を集計し、次号 N0.194 で、上位 2 作品を発表します。

同じ条件で書いた、富安陽子理事長の作品も公開します。お楽しみに！！

<詳細はこちらをご覧ください>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/storycompe.html

【3】全国のイベント紹介

●講座「生誕 130 年 宮沢賢治の世界へ 宮沢賢治 童話作家としての道程」
講師：遠藤 純（武庫川女子大学准教授、日本児童文学学会理事、宮沢賢治学会理事、IICLO 理事・特別専門員）

日時：10 月 1 日（木） 14：00～15：30 ※定員 330 人、有料、要申し込み

場所：大阪府立中央図書館 ライティホール

主催：大阪府立中央図書館指定管理者 長谷工・大阪共立・TRCグループ

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【4】プレゼント

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『ふたりのあした』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/uL2TpNhMEYWJpnQ9A>

締切は 10 月 13 日（火）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

実った水田にトンボが舞う、ようやく秋の気配です。秋と言えば、スポーツ・読書・行楽と楽しみはたくさんありますが、食欲の秋も捨てがたい。しかし今秋は、機会をとらえて新しいことにもチャレンジしてみようと思っています。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp